

## 村上春樹研究 - その創作方法 -

宮下 真彰

村上春樹は、処女作『風の歌を聴け』（1979）で群像新入文学賞を受賞しデビューした作家である。他に、『羊をめぐる冒険』（1982）で野間文芸新人賞、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）で谷崎潤一郎賞を受賞するなど現在までに様々な作品を発表している。近年では2006年にフランツ・カフカ賞、2009年にはエルサレム賞を受賞している。2009年に長編小説『1Q84 BOOK1・BOOK2』、2010年4月には続編の『1Q84 BOOK3』、そして12月には映画『ノルウェイの森』が上映され、活字のみならず幅広い世代にその作品が知られている。

村上春樹の作品には、明確な続編として書かれていないが、内容を見ると続編だと考えられる作品群や、以前に書かれた短編小説がその後再び長編小説となって書かれる、などの独特の創作方法が見られる。そこで村上春樹の主な作品が、どのような経過をたどってきたのかを、幾つかのパターンにまとめて、その創作方法を探ることを研究のテーマとし、村上春樹作品を考察した。

第一章では、「鼠三部作」と「1995年に起きた二つの事件」を題材にして書かれた作品に注目し、タイトルを見ても明確な続編として書かれていないが、内容から判断すると以前に書かれた作品の続編的位置にある「連作的作品群」について論じた。

第二章では、「短編小説から長編小説が書かれる」という村上独自の創作方法を『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』と『ノルウェイの森』に注目し、考察した。短編小説『街と、その不確かな壁』と『蚩』がどのようにして『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』、『ノルウェイの森』へとなったのか、その後の長編小説の骨組み・役割を論じた。

第三章では、長編小説の倍以上の作品数がある村上春樹における「短編小説の役割」について考察した。短編小説の書かれた時期や同じテーマを繰り返し使用した短編小説に焦点をあて論じた。

第四章では、全三部作の『ねじまき鳥クロニクル』や『1Q84』に共通して見られる、一定の時期を置いて続編（第3部・BOOK3）が出された長編小説に注目し、なぜ終わったはずの長編小説の続きが書かれたのか、その真相について自分なりに推測した。

村上春樹はその独自の創作方法を用い、読者を魅了する作品を数多く書いてきた。もしこれらの創作方法を用いず、村上が作品を書き続けてきたのであれば、現代文学の一人者として、これほど名を挙げられる作家にはなりえなかったのではないだろうか。創作のスタイルをひとつに絞らず、短編、長編、書いてきた作品全てをその糧とし、新たな作品を生み出していくのが村上春樹の創作方法である。

（指導教員 黒古一夫）